

「東海大学建学の思想とその源泉」

東海大学総長

松前達郎

第一部 科学技術者松前重義

【はじめに】

東海大学の創立者は、松前重義です。松前重義は一九〇一（明治三四）年熊本に生まれ、激動の二〇世紀に生き、一九九一（平成三）年この世を去りましたが、その間、科学技術者として、教育者として、ヒューマニストとして、自らの信念に基づく先駆的事業に取り組む一方、思想家として、政治家として、さらには柔道や野球を愛したスポーツ活動家として多彩な活動を行い、晩年は世界の東西冷戦の対立の中で、文化交流による相互理解の実践に努力し、一九八九（平成元）年に東西冷戦が終わりを告げたのを見届け、一九九一年、その歴史と共にこの世を去りました。

【現代文明論講義】

東海大学の創立思想や教育理念は、本学の創立者である松前重義が、今をさかのぼること一九五八（昭和三三）年当時から、東海大学の全学生に行っていた『現代文明論』という講義を通して学び取ることができます。この現代文明論という講義は、ただ文明の移り変わりを知るといった歴史講義ではなく、幅広い見方であらえた歴史の流れの中で、人間が創り上げていった文明の移り変わりの中に、何を見いだすべきかについて学び、学生一人ひとりが、歴史観Ⅱ即ち歴史的な世界の構造やその発展についての体系的見方や、世界観Ⅱ世界全体を関連づける見方、人生観Ⅱ人生の持つ意味や人生に対する態度についての考え方を培って、

自分なりにまとまった考えを持つようになってほしい、と願って始めた講義であります。

松前重義が創立した東海大学の教育の思想と理念、いわゆる『建学の精神』は、東海大学傘下の全ての教育機関に共通しています。創立者松前重義が、どのような考えのもとに東海大学や付属の学校を創っていったのか、そしてその源（みなもと）はどこにあったのかについて、歴史を振り返りながら述べていくことにします。

【松前重義のキャリア】

松前重義は、熊本県の出身、今日の熊本大学工学部の前身である、熊本高等工業学校という官立（国立）の旧制専門学校に入り、電気工学を学びました。そして、更に大学に進学しようとしたが、当時は専門学校から受験できる工学部を持っている国立大学は、唯一つ東北帝国大学だけでした。松前重義はその理工系の教育研究に優れていた東北帝国大学に入学し、電気工学の勉強を続けました。



創立者 松前重義

大学での卒業研究は、当時まだ誰も手をつけていなかった『真空管』の性能に関する研究でした。そして、真空管を使用したエレクトロニクス技術について学んだのです。

真空管は、今われわれが使っている携帯電話やCDプレイヤーやコンピュータなどの多くの電子機器や、あらゆる組み込み回路等に使われているトランジスタと同じような役割をするものです。それは、真空にしたガラス管の中に、電子を放出するための電極（陰極）と、真空中を流れる電子の流れをコントロールす



真空管

る役目の電極（制御グリッド）や、コントロールされた電子の流れを受け取るための電極（陽極）を封じ込んだもので、今のトランジスタと同じように電気信号の増幅や制御に用いられました。初期の真空管は一九〇四（明治三七）年J・A・フレミング^{（注1）}が作った二極管に始まり、一九〇六（明治三九）年にはデ・フォレスト^{（注2）}が制御電極を持つ三極管を発明、その形は電球に似て野菜の茄子のような形をしていました。

当時の日本の科学技術は、欧米に比べ、きわめて後れをとっていました。真空管もドイツやアメリカからの輸入品で、その数もきわめて少なかったのです。松前重義はその貴重な真空管を使って、卒業研究を行ったのです。

松前は大学で折に触れて教授達から、『日本の科学技術は欧米に比べ遅れていて、高度な技術を用いたほとんどのものが、欧米先進国からの輸入であり、このままでは日本の将来はない』といった話を聞いていました。負けず嫌いの松前の脳裏には、先進国を目指す日本にとって、独自の科学技術の育成が、国家戦略としてきわめて重要であり、自分も、電気通信技術者として、その使命を担うのだ、という決意が生まれていったのです。その決意が、これから述べる松前重義の新しい画期的な電気通信方式の発明となり、のちに理工系の技術者育成の教育機関設立へとつながっていきま

す。

工学部の電気工学科を卒業した松前重義は、大学で学び、研究した成果を生かそうと、大学を卒業した一九二五（大正一四）年に『通信省』に『雇（やとい）』として就職し翌年技師になりました。

当時は技術のことを司る技術職員を技師や技手（ぎて）と呼んでいました。専門職であり、当時の官庁の技師の身分は他の職種に比べ低く、今日という『職人』といった見方で、法文系出身職員に比べ責任ある

管理職への道も狭く、彼らの下で働く使用人的存在でした。

業務を行っていました。

【若き松前重義の悩み】

通信省の職場での雇としての毎日の仕事は、単純な仕事の繰り返しが多く単調でした。その職場環境の中で、松前重義は自らの生き方に焦りを感じ始めていたのです。それは、官庁という職場の現実が、それまで考えていた職場とは全く異なり、人々は建前に固執し、保守的な雰囲気まん延していたからです。

そこに居る人は、それぞれ個性や優れた能力を持っている人は多いのですが、優れた能力は認められないで外されてしまう。そして使命感をもった情熱は相手にされず、同じことを繰り返すばかりの前例主義がはびこっている。人びとは理想に欠け、氣力に乏しくなっているように見えたのです。

若き松前重義は、毎日こんなところだったら、自分もまた理想や活力を失ってしまうのではないかと考え始めたのです。

この悩みについて、松前重義は著書『松前重義わが



当時の通信省仮庁舎（1923年にマグニチュード7.9の関東大震災があり、この写真は2年後の仮庁舎）
《参考》1923年9月1日の関東大震災では、電気通信機能の大半が失われその復興には約2年半の日時を要した。

人生』の中で次のように述べています。

『現実主義の技術者で、科学の勉強ばかりしてきた私は、社会に出てみて、初めて自分の生き方を自問自答するようになった。科学以前の諸問題に直面していたのである。生き甲斐とはいったい何だろうか、人間一生に何をなすべきか、など真剣に考え始めた』（要約）

【内村鑑三との出会い】

こうした毎日を送っていたある日曜日、友人に誘われて、東京の新宿の柏木というところにあった『今井館』という講堂で、毎日曜日に開かれていた『内村鑑三』という人の『聖書研究会』に出席しました。一九二五（大正一四）年、松前重義二四歳の時のことです。

内村鑑三についてはみなさん知っていると思いますが、ここで簡単にプロフィールを紹介しておきます。

内村鑑三は一八七七（明治一〇）年、現在の北海道大学の前身であった札幌農学校に入り、当時教頭として



内村鑑三先生

アメリカから招かれていたW・S・クラーク博士^(注3)の影響を受けて、キリスト教信者となった人です。クラーク博士といえば、『ボーイズ・ビー・アンビシャス（少年よ、大志を抱け）』という言葉を残したので有名な人です。

内村鑑三は、キリスト教信者でありながら『無教会主義』を唱えたことで有名ですが、その『無教会主義』というのは、当時のキリスト教が、形式や、組織や、神学などにとらわれ過ぎていて、教会は形式主義になり、その生命を失っている、という考えに基づく

ものでした。それは教会が要らないというわけではありません。内村鑑三は教会に代わるものとして、『聖書研究会』という研究集会を行っていて、松前重義は、その研究会に出席するようになりました。

日曜日ごとに開かれていたその研究会では、聖書をただ単なる歴史や先人達の言葉を記録したものとして読むのではなく、聖書の持つ意味や解釈を研究して、

人類の歴史の中につくられていった、人間そのものの思想や、それによってもたらされた歴史的・地理的環境の変化を学ぶといった講演が行われていたのです。松前重義はその研究会で、一九一（明治四四）年に内村鑑三が行った『デンマルク国の話』という講演のパンフレットを手に入れ、それを読んで強い感動を受けました。



柏木の今井館での講義



デンマルク国の話 パンフレット

この『デンマルク国の話』はのちに小冊子にまとめられ『信仰と樹木とをもって国を救いし話』という副題をつけて、岩波文庫から出版されました。この話は一九三四（昭和九）年の我が国の中等教科書『国語』に「興国の樞（もみ）」の題名で採用されています。また、一九四七（昭和二二）年の文部省編纂の小学校教科書『国語』には、「みどりの野」というタイトルで掲載されています。

松前重義が強い感動を受けたこの話は、すでに読まれた人にもいると思いますが、ここで要約して紹介します。

デンマークの歴史を見ると、歴代の国王が勢力を争って行った周辺諸国との戦いが多いのに気がつきます。バイキングに始まる多くの戦いの歴史をもつ北欧のデンマークは、一八六四年、当時のプロシヤ（後のドイツ帝国）との戦いに敗れ、ユトランド半島の南の部分のシュレースヴィヒとホルスタインの両地方をプロシヤに譲らなければならなくなりました。失ったその国土は、デンマークにとつてはかけがえのない豊かな農地でした。デンマークに残された土地は乱伐などにより荒地となった土地で、いつも海からの風が吹きつけ、砂地が多く、土壌は痩せていて、しかも湿地帯が多い荒地でした。

国土は小さくなり、残された荒地れた地方に住む人々の数も少なく、国民が意気消沈していたときに、戦いに敗れて故郷に戻った一人の工兵士官（土木や通信などの技術的任務にあたる部隊）であった『エンリコ・ダルカス』^{（注4）}という土木技術者がいました。内村鑑三の

カスの息子は、樅の木の生態を研究して植林を行い、鬱蒼と茂る樅の木の林による防風林を育てたのです。

植林はデンマークの厳しい海岸気候を変え、砂丘の拡大を止めたばかりか、安定した気候をもたらしただけです。

内村は、この講演を通じて、何を訴えようとしたのでしょうか、それは、戦争に負けることは必ずしも国が滅びることではない。善き道徳、善き精神、善き文化、善き宗教があれば国は滅びないということと、武力によって失った土地を取り戻すのではなく、鋤と鍬をもって残された荒地を耕し、新しい農地を開発しようという、デンマークの平和国家としての再出発の



エンリコ・ダルガス



国境の移動図

講演は、その土木技術者のダルカスが、『再び戦争をして、取られた土地を取り戻すのではなく、武器を鋤や鍬に代え、残された土地を開墾して豊かな農地にしよう』と考え、『外に失いしものを、内にてとりもどさん』という、有名なスローガンのもと、立ちあがった話でした。

人々は溝を掘って水を通し、ヒース（荒地に這うように群生するツツジ科の低木）と呼ばれる荒野の植物を駆逐し、そのあとに牧草やジャガイモや甜菜（砂糖大根）を植えました。また、植物学者であったダル

歴史ではなかったでしょうか。

やがてデンマークは、戦争に負けて失ったシュレースヴィヒ地方に匹敵する新しい農地を創ることに成功したばかりか、このプロシヤとの戦いを最後に、それ以降、今日まで戦争を行わない、平和国家に変身したのです。そして、かつて『貧しき小さな国』といわれたデンマークが、今日では『世界有数の豊かな国』といわれるような国になったのです。

松前重義は内村鑑三の研究会で手にした、『デンマーク国の話』という小冊子を読んで、デンマークの歴史と文化に強く興味を持ち始めたのでした。

更に松前は内村の研究会で、病床にあった内村【一九三〇（昭和五）年三月二八日没】に代わって平林廣人が行った講演を聴きました。その講演は、デンマーク人の生活や、思想に最も大きな影響を与えた、宗教家・詩人・政治家・歴史学者のN・F・S・グルント^{（注5）}ヴィイという人の話でした。グルントヴィイはデンマーク国民の心を、『国民高等学校』の教育による意識改革



ニコライ・グルントヴィ

によって目覚めさせ、今日の民主的福祉国家に復興したデンマーク国民主義の父といわれ尊敬されている人です。

グルントヴィは英国を訪ね、産業革命による英国の発展や、至る所で見られる事業や活力に強い感銘を受けると同時に、産業社会で働く労働者の暗い面を見るなど、産業革命の長所と短所を目の当たりにしました。

一方、それにくらべ自国デンマークでは、国民の大多数は農民で占め、農民は封建的な農奴制度に甘んじ、大衆は歓楽と美食にふけていて、あまりにも活気の

いた。それはかつての敗戦国デンマークと通じるものがあった。そのような社会状態の中で、国民の意識改革によりデンマークの復興に努力したグルントヴィの偉大な思想や生涯に強く心を打たれた私は、「どうしても日本は救われるのか」の答えを見いだした。我が



デンマーク最初のレッディンの国民高等学校（1864年から1920年までドイツ領）

ない怠惰な生活を送っているのを痛感しました。グルントヴィは農民が封建的農業から脱却し、アイデンティティ（主体性）を持たせるためには、国民の意識改革が必要であると考え、豊かな農村文化を築き上げ、近代的民主国家をつくり上げるための『国民高等学校による農民教育』の創設を提唱したのです。

最初に創設された国民高等学校は、当時デンマークとドイツが主権争いを行っていた北シュレースヴィヒのレッディンに一八四四年に開設されました。

ニコライ・グルントヴィについての話を聞いた松前重義は、戦いに破れたデンマークの近代国家への復興の歴史が、多くの西欧諸国の歴史にある暴力によるプロセスとは異なり、教育による民主的近代国家形成の歴史である事に強く感銘を受けたのです。

松前重義は、この感動について著書『松前重義わが昭和史』で次のように述べています。

『私が内村鑑三の研究会に通っていた頃は、昭和の初期で、当時日本はデンマークのような敗戦国ではなかったが、関東大震災に続く昭和の大恐慌が社会不安を強め、人びとは享楽主義に逃避する傾向が拡がって

国の近代史の中で、伊藤博文と山県有朋という二人の政治家が大きな権力を振るった。だが、この二人は後世に何を残したか？ 伊藤は神奈川の大磯に「滄浪閣」を、山県は東京に「椿山荘」という邸宅を残した。これに対して同時代のわれわれの先達の大隈重信は「早稲田大学」を、福沢諭吉は「慶応大学」を残し多くの人材を世に送った。こうした先輩達の行動に深く敬意を表すると共に、私もまた教育者として先達の道を歩くことにした』（要約）

松前重義の『教育をライフワークとする決意』は、ここに生まれたのです。

松前重義二四歳の頃でした。

【長距離電話回線に無装荷ケーブルを使用せんとする提案】

通信省での電気通信技術者としての松前重義は、大正時代に聞かされていた通り、我が国の電気通信の普及が欧米に比べ劣っているばかりか、その通信網や施設・設備の殆どを国外からの輸入に頼っている現実に

直面しました。

当時の欧米の長距離電話通信は、装荷方式による方式が主流を占めていました。装荷方式は、距離が長くなると音声が減衰し聞こえなくなる欠点を補うため、回路の一定の距離毎に装荷コイルを挿入して減衰を防ぐ方式で、装荷コイルの間隔は約一・八キロメートルでした。

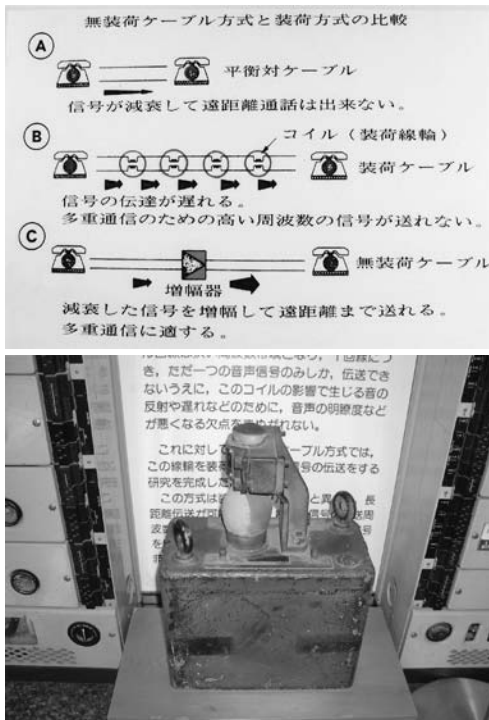
松前重義は、アメリカやヨーロッパのように陸上に敷設する通信網が主体となっている地域とは異なり、海に囲まれた島嶼（とうしょ）が多い我が国における長距離の電気通信のあり方として、装荷コイルを使わないで経済的に有利で将来性のあるエレクトロニクスを用いた新しい電気通信方式、すなわち【無装荷ケーブル】による通信方式を提案しました。

この【無装荷ケーブル】を用いた通信方式については、『長距離電話回線に無装荷ケーブルを使用せんとする提案』というタイトルで、一九三二（昭和七）年三月に電信電話学会に発表されましたが、この新しい【無装荷ケーブル】方式の提案には、当時の学会や

そのケーブルという単語の前に、あるなしの無しの『無』という字と、機械などの装置の『装』という字と、荷物の『荷』という字をつなげた、【無装荷ケーブル】という名称のものは何でしょうか。

【無装荷ケーブル方式の説明】

百科事典で【無装荷ケーブル】という項目を引くと、次のように説明してあります。



装荷コイル

【装荷ケーブル】方式による電話通信ネットワークの構築に取り組んでいた通信業界や、官界などが、こぞって大反対でした。

【無装荷ケーブル長距離通信方式について】

さて、ここからの話は、本学の歴史に深い関連を持つ『無装荷ケーブル長距離通信方式』の発明にかかわる話になり、専門的な内容になりますが、それは本学の教育思想やその理念を語るときに、必ず出てくるものですので、『無装荷ケーブル長距離通信方式』がどんなもので、本学の歴史とどんな関わり合いを持っているのか知っておいて頂きたいと思っています。

この通信方式の正式名称は『無装荷ケーブルによる長距離多重搬送方式』ですが、長い名前ですので、一般には【無装荷ケーブル】と呼ばれています。（以後文中では【無装荷ケーブル】と呼ぶ）

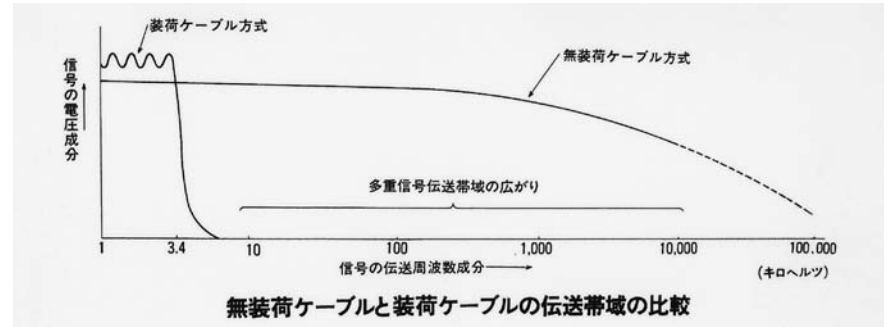
まずその名称について説明します。長いたくさんの通信回線を一つに束ねたものをケーブルと言いますが、

『無装荷ケーブル』とは、装荷ケーブルに対し、装荷コイルを挿入しない方式の通信ケーブルで、装荷ケーブルの欠点を除去するため、松前重義、篠原登が発明したもので、長距離の多重搬送通信に適した方式』と簡単に説明しています。

【装荷ケーブル方式の説明】

この説明では、【無装荷ケーブル】の無装荷から無という字をとった【装荷ケーブル】という言葉がでてきました。そこで更に辞典で【装荷ケーブル】を引いてみると、『音声信号の減衰量を少なくするために、一定距離ごとに装荷コイルを挿入する方式で、長距離通信用に開発されたが、多くの欠点を持つため、現在では無装荷ケーブルが多用されている』とでています。

簡単にいえば【装荷ケーブル】と【無装荷ケーブル】の違いは、装荷コイルがあるかないかの違いですが、その性能は基本的に大きな違いがあります。その内容について、もう



装荷方式と無装荷方式との比較図

少し詳しく説明しておきましょう。
まず、二本の電線を使って話をする場合を考えてみましょう。
近い距離であれば二つの電話機を二本の電線でつなげば話ができますが、距離が遠くなると、電線には電気抵抗があり、ますから、音声が減衰して会話ができません。従って長距離の通話を支障なく行うとすれば、音声の減衰を防ぐ装置が必要になります。

先程の【装荷ケーブル】方式の説明にあった『多くの欠陥』というのは、『音声の減衰』を少なくするために途中に電線を巻いたコイルを入れるために電線の長さが益々長くなり、音声振動が伝わる時間が長くなって会話が困難になることと、コイルを挿入するためには歪みや反響が発生し、通話の品質が極めて悪くなるという欠点があり、それらをなくそうとして、更に補償装置が必要になるなど、効率の悪いシステムでした。
しかも、決定的な欠点は、コイルを挿入するために通過できる電波の周波数範囲が限られ、一対の電話回路でたくさん通話を同時に行う搬送多重通信ができないということばかりか、挿入する装荷コイルによりコストが高くなり質的にも経済的にも適さない『多くの欠点』がありました。

【無装荷ケーブル方式発想の原点】

それでは、松前重義は長距離の通信の場合の音声の減衰をどういう方法で解決しようと考えていたのでしょうか。それは、大学時代に研究した真空管を用い、

減衰した音声振動を増幅する積極的な方法により、長距離でも明瞭な通話ができ、しかもいくつもの通話が同時にできる搬送多重通信が可能となる方式でした。

この発想の思想的背景について、松前重義は『発明記』という著書の中で次のように述べています。

『それは、私がかつて内村鑑三の門をたたいた事に始まる……内村鑑三のキリスト教は少なくとも儀式や制度を中心にした宗教ではない。彼の無教会主義は、ややもすれば形式的な儀式だけでもって救われたような錯覚に陥る所の、命のない信仰の姿に対し、真の信仰の復活を要求したためであった。

同様に私は、着想や、創意や工夫は、単なる頭の良さや、その人の器用さから生まれるものではなく、その人の抱いている思想の根底の上に生まれるものだと思っている。

飾りなき自然の姿に真の真理があり、美があり、麗しさがあるとするならば、技術に於いても同様であり、欠陥を補おうとしてコイルを入れたり、またその結果を補うために装置を入れるような工作を施してはなら

ないのであって、むしろそれを自然のままに置き、将来の技術を開発するべきである』(要約)

私はこの方式の根底には、Simple is Best (簡潔に勝る物なし) という思想があり、この思想は、『行きづまった時は原点に帰れ』ということに通じ、宇宙や自然のメカニズムの解明をはじめ、人間が創る社会の仕組みの対応や、政治や経済が生み出す社会構造や行動規範などにも通じるのではないかと思います。

【長距離無装荷ケーブル方式の実験に成功】

松前重義が提案した新しい【無装荷ケーブル】が実現可能かどうかは、実験を試みなければわかりません。しかし、就職した通信省の部署は、技術行政の中核である工務局ということで、研究所ではありません。ですからそこで研究や実験をすることは困難でした。

しかし、幸いなことに上役に【無装荷ケーブル】に期待を寄せていた人がいました。その人の名は、



梶井剛氏

『梶井剛(たけし)』という博士(技師)で、後の一九四六(昭和二一)年に発足した東海大学の学長を務め、その後日本電信電話公社(現在のNTT)総裁を務めた人でした。

梶井博士(技師)は、『無装荷ケーブル』の実験のために、当時、朝鮮海峡に敷設されていた海底通信ケーブルを使って『無装荷ケーブル』で電話の通話実験を行う事を提案し、それを受けて松前重義を中心とする技術者達は、一九三一(昭和六)年、多くの課題を解決して、当時世界でも例を見ない二〇〇キロメートルを超す長距離の『無装荷ケーブル』による電話を開通する実験を行い成功しました。更に大阪・神戸間で折り返し四三二〇キロメートルの回線を作成して通話試験を行い、より長距離の『無装荷ケーブル』による通話に成功しました。

信の本拠地であるベルリンの、ジーマンス社での『無装荷ケーブル』の実用化に関する意見交換でした。

松前重義は日本を出るに当たって、『無装荷ケーブル』方式に使用するケーブルや通信機器類の開発を関係のメーカーに依頼しました。日本国内ではドイツ留学中の松前重義から送られてくる資料を参考に、着々と『無装荷ケーブル』の実用化が進められていたのですが、開発や実用化に当たった基本条件として『本方式を構成する部分品並びに材料および特許は、純国産のものであること』という条件をつけました。その条件は当時の我が国の技術レベルでは極めて厳しい条件でした。特に、全く新しいケーブルや、重要な装置である搬送増幅関係の技術開発にあたった当時の我が国のトップクラスの技術者達の努力は、大変なものでありました。

これら開発に携わった技術者の中で搬送増幅機器開発を担当した『小林宏治』(日本電気社長・望星学塾塾生)や、使用するケーブルの開発に携わった『木村介次』(藤倉電線)の両氏がのちに本学の理事・教授



篠原登氏

一方、新しい無装荷方式に使用するケーブルや機器類の開発は、当時開発協力者であった『篠原登』技師を中心とする技術者たちにより、精力的に行われました。

ちなみに、篠原登技師は、松前重義の片腕として、東海大学創立の同志となった人で、戦後は一九五六(昭和三一)年に設置された科学技術庁事務次官として我が国の科学技術行政に携わり、本学副理事長・学長を務めた人です。

一九三三(昭和八)年、松前重義はスイスのルツェルンでの国際無線会議への出席と、『無装荷ケーブル長距離通信方式』に関する研究のため、一年間に及ぶドイツへの留学を命じられました。その主な目的は、ヨーロッパの電気通信事業の視察と、ドイツの電気通

に就任されたのもこれらの開発を通じて培われた同志的絆があったからであります。

ベルリンでのドイツの専門家ハンス・マイヤー博士^(注6)も『無装荷ケーブル』に対しては批判的で、議論はかみ合いませんでした。松前はドイツでの議論に見切り



ベルリンでバスに乗った松前重義(左から4人目)



アスコウ国民高等学校視察

にわたり約一〇カ所の学校を視察したのです。視察は、ただ訪問し見て歩くような訪問ではなく、学校の生徒と同様に泊まり込みで学校生活を体験する訪問もありました。

その一つに、現存するデンマークの国民高等学校の



デンマーク視察地図

をつけて、かつて内村鑑三の研究会で聞いたドイツの隣の国、デンマークへと向かったのです。

ヨーロッパ滞在中の松前重義が、一九三四（昭和九）年一月から二月に、二六日間かけて行ったデンマーク視察は、かつて内村鑑三の研究会で聞いた、ニコライ・グルントヴィの提案によって、デンマーク各地に設立された『国民高等学校』の教育の視察と、農業者としての農村の実態や、農村文化を訪ねる目的を持っていました。松前重義は、デンマーク視察の印象をまとめて、『デンマークの文化を探る』という本を出

版していますが、その序文には次のようなことが書かれています。

『恩師内村鑑三先生を通じて、デンマークの教育と文化に関心を持っていた私は、デンマークで、特に国民高等学校と農村の関係を視察した。私は教育家でもなければ宗教家でもなく、農業関係者でもない。ただ一人の電気技術者である。一人の技術者が、デンマークの文化の要素を求めて歩いた記録と、それによって得た結論である。デンマークに学ぶべきものは、まず、その国の歴史であり、特に国民高等学校の教育の精神である。国家の礎（いしずえ）は教育にあり、精神にあり、信仰にあることを事実として証明したのは、デンマークである』（要約）

一九三四（昭和九）年一月、ベルリンを後に松前重義はデンマークの国民高等学校を視察する旅に出ました。

ドイツ海軍の基地キールを経てホルスタインの沃野を北上し、かつてプロシヤとの係争の地であったシュレースヴィヒ地方を通じてデンマークに入り、一カ月

中で、最も古い歴史を持ち、代表的教育活動を展開してきた学校にアスコウ国民高等学校があります。

一八六五年に教師三人と生徒三〇人で始まった学校ですが、特筆すべきは一八七八年から自然科学のコースを設置するため、気象・物理学者のポール・ラ・クル（注）を迎えました。ラ・クルはデンマークが一年中風に恵まれていることに注目して風車発電に取り組み、一八九一年、風力の変化に対応した発電と、電力蓄電ができる世界初の発電システムを開発、一九五八年までアスコウの町にも電力を供給しました。



ポール・ラ・クルの風車発電

第二部 教育者松前重義

一九三三（昭和八）年からの約一年にわたる海外留学から帰国した松前重義は、早速、『無装荷ケーブル長距離通信方式』の実用化に取りかかったのですが、すでに述べたようにそれに使用する通信ケーブルや、増幅装置などの機器類の製造に当たって、関連する通信機器並びにその材料は、一切輸入に頼らないこと、また一切の外国特許や、輸入製品を使用しないこと、という厳しい条件をつけました。それをクリアするための研究者達の努力は目を見張るものがありました。

【We Can Do】

それは、我が国の自主技術を育てるための松前重義の非常手段であったのです。優れた技術者がいる通信機器のメーカーにとって、それができないことはない

はずであり、それまでは、安易な外国製品の輸入に頼っていたために、自主技術が育たなかったのであって、力を合わせて努力すれば、すべて国産の技術で完成できるといふ、松前重義の信念に基づいた命令だったのです。

まさに、今で言えば、アメリカのオバマ大統領の言葉（※）を借りるならば、『All this we can do. And all this we will do.（これらは、われわれにできることであり、やらなければならないことである）』なのです。

（※大統領任期 二〇〇九年一月二〇日～二〇一七年一月二〇日）

【技術者運動から科学技術立国へ】

松前重義が帰国した一九三四（昭和九）年に【無装

荷ケーブル』の実用化が実現すると、通信省内部に新しい風が吹き始めました。かねてから技術官僚の地位向上を求めて、農学系、林学系、医学系、土木系などの技術者が起こした技術者運動は、地位向上や待遇改善が目的だった当初の目的から抜けだし、松前重義を取り巻く若き通信技術者を中心に、技術を基盤とする科学技術立国への道に繋がっていきました。

当時の活動について、日本の教育史・歴史社会学者である大淀昇一は次のように述べています。

『我が国の歴史の中で、一九三四年からの時期は、松前重義の無装荷ケーブル方式による長距離通信方式の実用化に伴い、外国製品依存から脱却した完全国産化などによる長足の進歩が見られる特色のある時期であった。無装荷ケーブル方式の実用化にあたり、その機械の構成につき徹底した国産化で取り組もうとした通信省技師、電気通信工学の専門家や、機材納入会社の技術者達の一大技術運動が始まった時期であった』（要約・大淀昇一著『技術官僚の政治参画』より）

電気通信分野において我が国が、今日、優れた製造技術とエレクトロニクス技術を持つ先進国になった源（みなもと）は、この【無装荷ケーブル】の開発に始まった、国産技術開発にあったのです。

【望星学塾の創設】

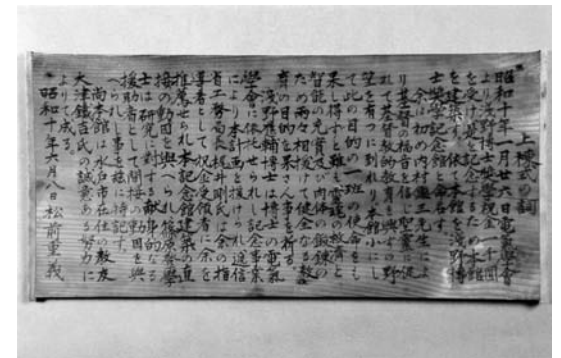
松前重義の『無装荷ケーブル長距離通信方式』とい



講演する松前重義



電気学会からの表彰状



上棟式の詞

私は、日曜集会を始めた一九三六（昭和一二）年の一月に、多磨墓地の内村鑑三の墓参りに家族とともに連れて行かれたのを記憶しています。亡き内村鑑三の霊に日曜集会を始めたことの報告をしたのだろうと思います。

この活動が『核』となって東海大学の源泉となった『望星学塾』が創設されたのです。

『望星』の名の源はアメリカの思想家・詩人であったエマーソン^{（注8）}の『社会と孤独』の中にある言葉『汝の車を星に繋げ』にあり、松前重義は『車』を『希望』に替えて『若き日に汝の希望を星に繋げ』として自らの思想を表現し『望星学塾』と命名したと伝えられています。

う、新しい電話通信の発明に対して、電気学会が奨学金千円を贈りました。明治・大正時代の電気工学者『浅野応輔（おうすけ）』博士の記念事業でした。松前重義はその奨学金を基に自己資金を足して小さな建物を建て、その建物に『浅野博士奨学記念館』と命名し、その建物で内村鑑三が亡くなり途絶えていた『聖書研究会』と同じような日曜集会を始めたのです。

当時の望星学塾の建物の一階にはパーティションで仕切られた小さな講義室と図書棚があり、その隣は多で講演会が行われましたが、太平洋戦争以降望星学塾の活動休止と共に中断しました。この活動は一九八三（昭和五八）年から『望星講座』として再開されて定期的に行われるようになり、二〇一九（平成三二）年三月現在までに行った講座は、四三四回に及んでいます。

目的に使用できる広間になっていて、広間でデンマーク体操や時には柔道などが行えるようになっていたと記憶しています。建物の一部は二階建てで、二部屋の個室があり、その窓から西を望むと、遙か彼方の秩父から連なる山並の向こうに、一段と高く富士山が見えていました。建物の前の通りは田舎道で、望星学塾と書いた表札の前に立って見ると、近くを流れる玉川上水に沿った数軒の住宅があるのみで、あとは一面麦畑が広がっていました。敷地の中には、松前重義の家族の住居があり、樅の木が植えられた芝生の庭では、時折、研究集会の人たちや家族の体操が行われ、五月にもなると片隅に建てられたポールには鯉のぼりが掲げられていたのを思い出します。

当時の学塾の活動は、教育研究、聖書研究、出版事業などでした。なかでも学塾の精神を広く社会に問う活動として、『我等の世界観』というテーマで一九四〇（昭和一五）年三月に東京・神田駿河台のホール



望星学塾復元模型



望星学塾正門

『望星学塾』の創設とその活動精神について松前重義は次のように述べています。（碑文より）

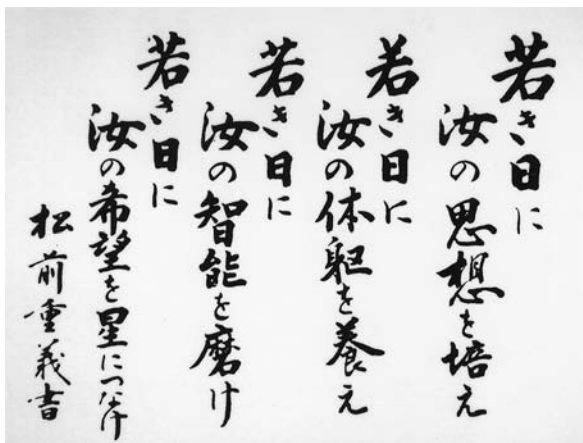
『昭和十一年無装荷ケーブル通信方式の研究により、電気学会から贈られた浅野奨学金を基金として、私はこの地に望星学塾を創設した。この学塾は祖国の将来は教育によって有為なる人材を世に送るにあるとの信念から、デンマーク復興の父ニコライ・グルントヴィの、国民高等学校の教育を範として開いた青年道場である。（中略）私はかねて正しい思想教育の礎の上にのみ、科学技術は社会と国家にたいして優れた歴史的役割を果たすことが出来ると主張していた。今日の東海大学の建学の精神はここに発しており、本学塾はまさに東海大学の母胎と言わなければならない。』

この塾の塾生は、寄宿する大学生と、通塾する社会人のエリート達でしたが、塾での学びはどのような考えに基づいたものであったのでしょうか？

それは、『知識は外から注ぎ込まれたもので、それだけでは百科事典の役割しかもたない。重要なことはそれをどう生かすかであり、そのためには歴史や世界

生活管理を行うという形態がとられていました。

松前重義は塾生たちに、人生への信条として四力条の言葉を与えました。①若き日に汝の思想を培え ②若き日に汝の体軀を養え ③若き日に汝の智能を磨け ④若き日に汝の希望を星に繋げ、の四力条の言葉です。



四力条の信条

や人生などについての見方を養うことによって、自らの頭脳に培われてゆく思想が重要であり、それによって人は、その行動や物事の判断に、誤りのない選択を行うことができる』という考えに基づいたものでした。

つまり、いくら頭脳が明晰だといわれても、如何に知識が豊富であつても、明確な思想を持たない人は、真に優れた人としての価値がないということであり、教育の最終的段階にある学生に『思想』を培う環境を与え、教育の集大成として、それぞれが自分なりの『思想』を培うための手助けをするという自己研鑽の学びの塾でありました。

この塾の活動は、まさに創立者の教育思想の原点であり、この塾で松前重義が毎日曜日に行っていた講義が、後に東海大学で始められた、他の教育機関にはないユニークな講義として評価される『現代文明論』という講義に繋がっていったのです。

この『望星学塾』に寄宿する大学生の定員はわずか八名であり、寄宿する塾生達が、自治的な寮としての

この四力条の言葉は、今日まで東海大学の教育の根幹をあらわす信条（モットー）として伝えられています。

従って『無装荷ケーブル長距離通信方式』という新しい電気通信方式の発明が『望星学塾』を生み、東海大学に発展して行く源になったばかりか、のちにその源は、外国の技術に依存していた我が国の電気通信事業に、新しい自主技術の夜明けをもたらし、我が国の科学技術立国の道を拓いたのでした。

一九四〇（昭和一五）年当時、すでに我が国は中国と戦争を行なっており、一九四一（昭和一六）年には、アメリカ・イギリス・中国・オランダの四力国の連合国を敵にまわしたアジア・太平洋戦争に突入していき

ました。青年の自己研鑽の場であつた望星学塾も、戦争という嵐を避けることができませんでした。戦争は次第に負け戦となり、多くの学生が学徒出陣により兵隊として召集され、戦争に送り出されたのです。やがて、国

内では食糧や生活物資が極度に不足するようになって塾生活が困難となり、ついに望星学塾は活動を停止せざるをえなくなったのです。

一九四二（昭和一七）年末に最後の塾生として塾を去った東京帝国大学農学部の中保慎氏は、当時の様子を『松前重義と望星学塾 その思想と行動』で次のように述懐しています。

『塾では毎日曜日に聖書研究の集会があった。集会には松前先生の他、塾監の篠原登先生や大久保先生が常時出席され、ときどき平山先生、平岡先生など、松前先生と親交のあった先生方が出席され、聖書講話がおこなわれたが、その後必ず松前先生の痛烈な時局批判のお話があった。今にして思えば先生は既に当時の日本の技術水準と生産力から、戦局の行方を見通され、国を救うために戦争終結の運動を起こし、時の権力東条内閣を打倒する決意をされていたのであろう。しかし、このような充実した塾生活も長く続かなかった。この頃から先生に対する憲兵の尾行など、当局からの監視が厳しくなり、日曜集会も絶えがちとなった。そ

しかし、その後の太平洋戦争終結を経て一九五一（昭和二六）年までの間は、教育をライフワークとする決意のもとに教育事業に取り組み始めた松前重義にとって、極めて波瀾万丈の苦難の時代がやってきた。それは、次の二つの事件による教育活動からの隔離の危機でした。

その一つは一九四四（昭和一九）年七月、二等兵として召集され、戦地に送り出された『懲罰召集事件』



航空科学専門学校

の頃、先生は大変多忙で、連日帰宅も遅く、殆どお目にかかる機会もなかったが、奥様から先生が技術者だから浄財を集めて、理想的な技術系大学を創るため各方面を奔走されていることや、清水市に大学用地を確保する見通しがついた事などは、逐一聴いており、現在の東海大学設立の構想がこの頃から先生を中心に進められていたのだと思う』（要約）

【航空科学専門学校の設立】

松前重義は、一九四一（昭和一六）年一二月三日に通信省の工務局長になりましたが、その五日後の二月八日には真珠湾攻撃が行われました。かねがね理工系教育機関の設立を考えていた松前重義は、活動を休止した望星学塾に繋がるものとして、一九四二（昭和一七）年に学園を創立、一九四三（昭和一八）年に『航空科学専門学校』（校長・野田清一郎）を静岡県清水に開校、一九四四（昭和一九）年には『電波科学専門学校』（校長・仁科芳雄）を東京の中野区江古田に開校し、着々と理工系教育の基盤を創りました。

であり、もう一つは一九四六（昭和二一）年の占領軍による『公職追放事件』で、一九五一（昭和二六）年一〇月までの約五年にわたり教育事業に携われなくなったことでした。

【第一の危機・懲罰召集令】

『懲罰召集事件』は、太平洋戦争が始まってまもなく、海軍の依頼により、日米の工業生産力調査チームを編成し調査を行った結果、戦争を続けることの無謀さが明らかになり、戦争の早期終結が必要であると訴え、東条内閣打倒運動に参加した松前重義に対する陸軍軍部による懲罰的臨時召集令の発動であります。

松前重義は我が国の情報通信を司る通信省の工務局長という重要な役職であったにもかかわらず、一九四四（昭和一九）年七月、一兵卒（二等兵）として召集され、戦地のフィリピンに送られたのです。

なぜ生産力の調査の依頼がきたのかといえば、通信省工務局の仕事は、通信事業に関する一切の機器や資



臨時召集令状

我が国の生産力と格段の差がある現実を痛感して帰国しました。

そこで太平洋戦争に突入するとすぐに我が国の主な軍需工場を視察しましたが、工場ではただ多くの人間がうごめいているばかりで、生産の管理や、効率的生産システムが全く機能していないのを目の当たりにしました。それは戦争を行うような状況ではなく、早くこの事実を調査して戦争の終結に向かわせなければならぬと痛感していたのです。

しかも、政府はアメリカが発表する経済関係の統計や数字を、アメリカの宣伝だとしていたばかりか、その反面、日本政府の企画院が発表する統計や数値は、明らかに水増しであるのが見え見えでありました。

材について、膨大な民間調査を行っており、絶えず我が国の経済情勢や技術力を熟知していたからです。
松前重義は、一九三四（昭和九）年、先程述べたドイツ留学の帰りにヨーロッパからアメリカを回り、重工業生産現場を見学し、その近代的生産力に圧倒され、

海軍省軍務局は成り行きを心配して、松前重義に日本の生産力の調査を依頼してきました。松前は早速、通信、商工（通商産業省）、農林（農林水産省）、鉄道（国土交通省）、企画院などの若手で、第一線の生のデータを持っている技術者を集め（二四人）、無装荷ケールブル発明の時のシステムと似たシステム調査方式に

よって、我が国の生産力の調査を行ったのです。

しくなり、自宅の周りに憲兵がうろつくようになったのを覚えています。

【日米生産力調査結果】

一九四三（昭和一八）年一月にまとまった調査結果は、アメリカの生産力はあらゆる分野で我が国を大きく引き離しており、鉄鋼の生産は日本の二〇倍、航空機は一〇倍以上、船舶は一年間で日本の全船舶保有量が生産できるなど、格段の差がある事がわかったのです。

この調査結果は松前重義によって、海軍軍令部の会合で発表されましたが、『内閣が発表する軍需生産計画は宣伝のためのものであり、欺瞞に満ちている……このような状態では東条首相がいくら必勝の信念を唱えても、戦争の結末は惨憺たる滅亡に通じる。』という結論でした。

この調査結果と結論は、東条英機首相の耳にも入り、大きなショックを与えたのは当然でしょう。このこと以来、当時高校生だった私でしたが、軍部の監視が厳

太平洋戦争末期の一九四四（昭和一九）年には、東条首相みずから軍政の長である陸軍大臣、軍司令の長である参謀総長を兼務し太平洋戦争を続行したのですが、当時の東条首相の三権の一元化は、海軍はもとより、陸軍内部や右翼的政治結社や実力者達からも批判され、東条内閣打倒の機運がみなぎっていました。窮地に追い込まれつつあった東条首相は、方針に逆らう者は、戦地に送るといった『邪魔者は消せ』といった懲罰行為を、一九四四年七月の東条内閣総辞職直前まで行っていたのです。

東条内閣は一九四四（昭和一九）年七月に総辞職（終戦一九四五年八月一日）する事になりますが、その直前に内閣打倒運動を行っていた松前重義に懲罰召集令を発動したのです。

一九四四（昭和一九）年七月、懲罰召集された松前重義は、熊本の第二二部隊の二等兵として部隊と共に、

淡路丸という爆薬運搬船に乗せられ、一六隻の船団を組んで北九州の若松港から出航、他の船が次々とアメリカの潜水艦の餌食となる中で、九死に一生を得てフィリピンのマニラに到着しました。その後直ちに現地の南方軍総司令部の命令で、二等兵のままサイゴンの南方軍総司令部付き軍政顧問に任命され、南方の産業現地調査の特別任務を担当することになりました。

この特別任務は、現地の陸軍の戸村盛雄参謀（中佐）が、松前重義が召集されたいきさつが東条一派の仕業である事を知っていたからで、戸村氏は当時を振り返り『松前文庫』第二集で次のように述べています。

『今、最も重要な情報通信の最高責任者を召集するとは、陸軍は取り返しのつかない過ちを犯した……私にはもはや、陸軍省は相手にせずと決意し、私の独断で松前さんを総司令部付に転属させ、少将と同じ勅任官待遇とする稟議書を作成し、総司令官の寺内元帥の了解をもらいに行った。元帥は、よくやった、東条がそんな非道なことをするのなら俺がその稟議書に判を押すと言って判を押してくれたのがうれしかった』（要約）

『二個の爆弾によるかかる巨大なエネルギーの発生は、原子の壊裂を利用する以外には現在の科学常識をもって推定するを能わず。広島市被害状況調査報告 松前参技官』（要約）

一九四五（昭和二〇）年八月一日、太平洋戦争は日本の無条件降伏で終わりました。

沖縄をはじめ南の島々は次々と占領され、首都東京や主要都市は相次ぐ空襲で壊滅的被害を受け、国民は虚脱感にとらわれ、物資は不足し、毎日の食料もままならず、戦後の日本の行方はどうなるのか、誰もわかりませんでした。

【逋信院総裁に就任】

一九四五（昭和二〇）年八月終戦を迎え、松前重義は、八月三〇日逋信院総裁に迎えられました。逋信院総裁としての松前は、廃墟となった全国的な電信電話網の復旧と整備、そして更なる普及や、公共放送機構の充実と運営改善など数多くの復興事業を行いました。



戸村盛雄氏

自足するにはほど遠いという結論に達し、その旨総司令部に報告しました。その間、先程の戸村参謀は自分の身が不利になるのも顧みず、陸軍省に松前二等兵の召集解除を掛け合い、その結果、陸軍兵器学校勤務という内地への帰還命令が発せられたのです。

南方の戦地から帰還した松前は、一九四五（昭和二〇）年五月一九日に召集解除となり、技術院参技官になりました。その後の八月六日に広島に超強力新型爆弾が投下され、広島は廃墟と化し、技術院は調査団を編成、松前はその団長として広島に飛びました。松前の目には破壊の状況からその爆弾が原子爆弾である事は一目でわかりました。

一方、学校は、社会の混乱期に経理はずさんになっており、国庫補助もなくなり、収入はわずかで経営は破綻寸前でした。松前は仕事の傍ら学校の再建に取り組みました。清水や東京の各地に散在している学校の校舎や校地を整理統合し、大学に昇格する作業です。

一九四五年八月航空科学専門学校に電波科学専門学校（東京・江古田）を吸収合併し、のちの東海大学の基盤となる『東海専門学校』（一九四五年一〇月『東海科学専門学校』に改称）を清水の地に立ち上げました。

松前は逋信院をもとの逋信省に昇格させるための努力をし、その見込みがついた一九四六（昭和二一）年四月、逋信院総裁の要職を辞任しました。そこには、教育により戦後日本の再建に全力をつぎ込むという松前の強い決心がありました。

【友情の絆】

我が国の将来を支えるのは、科学技術の力による以外ないという信念に燃える多くの技術者達の温かい支

松前重義はシンガポールを振り出しに、各地を巡回した現地調査の結果、その生産規模は町工場の域を脱せず、軍隊が自給

援を基に、理科系を中心に文科系も併設した新しい大学を設立するためには、設立事務所や資金や広い学校用地の確保が必要でした。しかし設立に必要な資金はありませんでした。松前重義が持っていた財産は、『金ではなく高い理想』であり、『無装荷ケーブル』の研究や開発にあたった各方面の技術者達や、望星学塾の集会を通じて培われた多くの同志達の『友情の絆』でした。

この『友情の絆』は、戦地で自分自身の危険を顧みず松前重義二等兵を南方軍総司令部付軍政顧問に任命した戸村氏も例外ではなく、松前重義の教育事業の協力者でした。

【六〇〇名の寄付者】

日本中の技術者達が大学設立のために給料の一部をさいて寄付してくれました。更に設立の趣旨に賛同する企業からも寄付がありました。集まった資金は約八〇万円。これは今の一八億円ぐらいです。この資金を基に大学建設にとりかかったのです。

年五月一日、松前重義とともに『無装荷ケーブル長距離通信方式』の開発に携わった多くの技術者や企業、望星学塾を取り巻く人々や、技術者運動を通じて意気に燃える多くの有志の人たちの協力によって、旧学制による大学の最後期の大学として誕生したのです。

大学の設立趣意について、松前は一九四一（昭和一六）年二月二二日の読売新聞で次のように述べています。

『この理工科大学の教育方針は、ただ単に科学技術の分野にとどまらず、科学技術の政治、経済への関連性を明確にし、更に歴史学、地理学を重視し公正な国家観、世界観を持った科学人を育成し、東アジアの性格の理工科学を創設することを目標とする』（要約）

【設置認可申請書に述べられている基本理念】

大学設置に当たり、その申請書に述べられている設置の主旨は次のとおりです。

（一）文化科学と自然科学との融合による確固たる歴史観、国家観、世界観を把握せしめる。



600名の寄付者

戦争が終わり海軍は解体されましたが、土地は残っていました。清水の三保には、元清水海軍航空隊の跡地と建物があり、その払い下げを受けて大学用地としました。必要な機器類は陸軍航空技術研究所から譲渡を受け、文化系の図書は徳川家の蔵書を借受、東海科学専門学校の東海大学への昇格の申請を行いました。このようにして東海大学は、一九四六（昭和二一）

（二）文学部と理工学部を設け、相互におのおの共通の必須科目を設け、他の科目は各学部を通じ選択自由ならしめ、文科の学生には自然科学との関連において文化科学の真髄を把握せしめ、理科の学生には確固たる国家観、世界観を把握し、科学の使用命を体得せしめる。

この主旨は、創立者松前重義が望星学塾時代に青年に与えた四カ条のモットーと共に、現在もお東海大学の教育の基本的な理念として受け継がれています。

【第二の危機・公職追放令】

しかし、大学発足後まもなく、新たな危機が訪れました。それは、松前重義に対する連合国総司令部（GHQ General Headquarters）の公職追放令の発動により、教育事業に携わることができなくなった時期が続いたのです。

公職追放令というのは、戦後我が国を占領し行政を管理していた連合国総司令部最高司令官ダグラス・マッカーサー^{（注9）}の覚書に基づいて一九四六（昭和二一）年

に発動した国家主義者など不適当と考えられる者を公職から排除する法令で、議員、公務員、その他政界、財界、言論界の指導的地位の者から約二〇万人が追放されました。

しかし、その審査があまりにも形式的であり、松前重義に対する追放は誤認があったとして、一九五一（昭和二六）年に追放が解除されましたが、意気に燃えて教育事業に取り組みつつあった松前重義にとつて、二等兵として召集された一九四四（昭和一九）年から一九五一年に公職追放が解除されるまでの間は、自ら創立した教育機関への関与ができない精神的苦悶の時期であつたといえます。

松前重義の公職追放が解除されて大学に戻つてみると、大学は惨憺たる状況で衰退の一途を辿っていました。入学者は急激に減り、経営は破綻寸前で、給与の支払いもままならない状況で、教員は次々と退職、しかも、法人の土地や施設は売却されつつありました。当時の状況を本学建学時期の同志であり、我が身を

買収する事になり、東京代々木への移転が行われました。

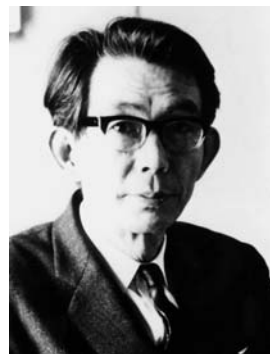
代々木校舎の新しい一号館の設計・管理は前に述べた『技術者運動』の同志であつた『山田守』氏が無報酬で行い、一九五五（昭和三〇）年工学部の入学試験が行われ約六〇名の入学者を迎え、東海大学の再建はじまったのです。

第一号館の建設が終わると、第二号館の建設計画に着手しました。設計は『山田守』氏の犠牲的な奉仕によつてできましたが、建物を建てる資金が不足し、一階だけが立ち上がったところで工事が止まってしまいました。この難関を乗り越えて銀行から資金を調達し



山田守氏

工事が再開されたのは、かつて松前重義が戦争終結を目指し東条内閣打倒運動に加わっていた時、東条批判の資料作成を手伝



牧野不二雄氏

省みずに本学の再建に生涯の大半を捧げられた『牧野不二雄』教授は、『松前文庫』第八集で次のように述べています。

『松前先生が復帰された時の大学の現状は、実に惨憺たるもので、学生数は急速に減り、先生方は次々とやめられ、残られた先生方の給料は遅配・欠配の連続であつた。苦しい時代はそれから三、四年つづいた』松前重義は、直ちに大学があつた清水におもむき、学生と教職員を集めて大学の運営についての決意を表明し、大学再建への取り組みが始まりました。

それは、学生募集を停止し、大学を東京へ移転する計画でした。

一九五三（昭和二八）年最初に理事会が開かれ、東海大学の東京移転が提案され、用地を探した結果、廃校する計画であつた名教高等学校があり、東海大学と名教学園の二法人が合併する形式で東海大学が校地を

つっていた海軍省軍務局の主計中尉で、戦後大蔵省に勤務していた二人の課長の温かい友情でありました。

このように東海大学は、危機に直面するたびに、互いに信頼する多くの友人の友情に支えられて、現在学



代々木校舎

園本部がある東京の代々木キャンパスへの移転が行われ、今日の学園へと発展する基盤が創られていったのです。

東海大学の校歌の二番に、『西には遠く富士の峰 東に筑波山の波 代々木の台にそびえ立つ 見よ東海の学舎を』と歌われているのは、当時周辺には高い建物がなく、五階建てのX字型の屋上に螺旋状の塔がそびえる二号館からの眺望を歌ったものです。

本学はこのような幾多の苦難を乗り越えて、その後、多くの人びとの支援と努力のもとに発展し、幼稚園から大学院までの教育を全国的に展開する総合学園としての今日を迎えたのですが、私たちは、その歴史の中に、信頼と友情と同じ理想の絆の基に本学の発展に努力を尽くしてきた多くの同志がおられたことを知らなければなりません。

一九〇一（明治三四）年に生まれ激動の二〇世紀に生きた本学の創立者松前重義は、建学の歴史の中に出てきた方々、あるいは名前こそ出てきませんでしたが、松前重義の教育に対する情熱に共鳴し、学園創立に協

力を惜しまなかった多くの建学の同志の方々への思いを、自ら作詞した『友情の歌』に託し、一九九一（平成三）年八月二五日、その波瀾万丈の生涯を閉じました。

松前重義作詞『友情の歌』

混濁の世に生をうけ 信頼世々に消ゆるとき
友のまことを君に見て われに無量の涙あり
君が憂いにわれは泣き わが喜びに君は舞う
人生意気を感じては 無限の力われに湧く

今後、私学である本学園にとって、私たちが、最も配慮しなければならない重要な課題は、①学園の規模が大きいために生じる教職員の同志的結合の減退、②組織の大きさから生まれる依存体質の蔓延、③私学として最も重要な建学の精神の空洞化、④帰属意識の衰退、などがあげられますが、このような事態に覆われた私学は、もはや私学としての存在意義が失われ、ただ単なる教育工場に過ぎなくなるのではないのでしょうか。

【今日の望星学塾】

今日お話しした望星学塾が活動を再開したのは、一



今日の望星学塾

九七六（昭和五一）年五月五日です。学塾の主な活動の一つとして、武道教育を通じての青少年育成のための『松前少年柔道塾』という柔道教室を開始した時からです。その後柔道塾は、松前重義が国際柔道連盟総会で会長に就任した翌年の一九八〇（昭和五五）年五月五日の開塾記念日に『松前柔道塾』に名称を変更し今日に至っています。我が国の義務教育では、二〇一二（平成二四）年から中学校で武道が必修化されましたが、松前柔道塾が同じ趣旨で柔道及びスポーツを通じての全人的教育を始めたのはそれより三六年前のこととて、まさに先駆的存在でした。この教育活動は望星学塾新館が建設され、専用の一〇五畳の柔道場ができて塾生が二〇〇名を超えるようになった頃から、国外にも知られるようになり、近年、デンマーク、ロシア、イスラエル、アメリカ、カナダ、中国、インドネシア、フランス、ドイツ、イギリス、ブルガリア、アラブ首長国連邦など国外からの指導者や見学参加者が増えてきました。

創立者松前重義が今から八〇年あまり前の一九三五

（昭和一〇）年に武蔵野の地に播いた望星学塾という一粒の種は、希望を星に繋ぎながら戦争という風霜の時代を乗り越えて今日を迎えました。現在の望星学塾の活動は、大きく分けて松前柔道塾、望星講座、研修会、研究会、夏期学校やスポーツ健康教室などが挙げられます。開塾から八〇年あまり、戦前は国を憂う青年達の研鑽の場として、戦後は子供たちの柔道及びスポーツを通じての全人的教育の展開や地域に根ざした生涯教育や社会活動など、創立者松前重義の東海大学建学の母胎としての精神を継承して、小さいながらも価値ある存在として社会教育を推進しています。

【結び】

東海大学の源泉となった望星学塾の創設に始まった松前重義のライフワークは、理工系教育機関の航空科学専門学校の開校を経て、東海大学の設立となり、今日では多くの教育機関を持つ東海大学教育システムを形成し、二〇一七年に建学七五周年を迎えるに至りました。今後、私たちを取り巻く社会的環境は、国内外

とも更に厳しさを増すでありましょう。今こそ、私たちは力をあわせ歴史の波を乗り越えて進まなければなりません。その精神的支えとなる本学の草創期の歴史の一部をお話ししましたが、本学の建学の精神の理解の一助になれば幸いです。

※この冊子は、二〇二三年度学校法人東海大学新任教職員研修（二〇二三年七月一七日於東海大学儒恋高原研修センター）での講話をもとに、二〇二六年六月に増補改訂し、二〇一九年六月に更に改訂したものです。

注

- (注1) John Ambrose Fleming (一八四九～一九四五)
- (注2) Lee De Forest (一八七三～一九六二)
- (注3) William Smith Clark (一八二六～一八八六)
- (注4) Enrico Mylius Dalgas (一八二八～一八九四)
- (注5) Nikolaj Frederik Severin Grundtvig (一七八三～一八七二)
- (注6) Hans Ferdinand Mayer (一八九五～一九八〇)
- (注7) Poul la Cour (一八四六～一九〇八)
- (注8) Ralph Waldo Emerson (一八〇三～一八八二)
- (注9) Douglas MacArthur (一八八〇～一九六四)

